

令和2年度学校自己評価システムシート（国際学院中学校高等学校）

目指す学校像	建学の精神「誠実・研鑽・慈愛・信頼・和睦」を身に付けた人材の育成
--------	----------------------------------

重点目標	1 GIGAスクール構想への対応 2 グローバルネットワークの推進 3 新型コロナウイルス感染症対策の推進
------	---

達成度	A	ほぼ達成(8割以上)
	B	概ね達成(6割以上)
	C	変化の兆し(4割以上)
	D	不十分(4割未満)

※学校評価実施日とは、学校評価委員会を開催し、学校自己評価を踏まえて評価を受けた日とする。

書面開催 学校評価委員 4名 事務局(教職員) 14名

※ 重点目標は3つ以上の設定も可。重点目標に対応した評価項目(年度達成目標を意味する。)は複数設定可。
※ 番号欄は重点目標の番号と対応させる。評価項目に対応した「具体的方策、方策の評価指標」を設定。

学校自己評価						
年度目標				年度評価(3月31日現在)		
番号	現状と課題	評価項目	具体的方策	方策の評価指標	評価項目の達成状況	達成度 次年度への課題と改善策
1	○校内のネットワーク環境は、一部の教室にWi-Fi環境が整っていない等、十分に整備されているとはいえない。 ○ICTを活用した教育活動については、中高一貫部を中心に積極的に活用している授業が増えたといえる。更なる効果的な活用については課題が残る。	①校内通信ネットワーク等、学校ICT環境の整備 ②ICTを活用した学習活動の推進 ③生徒・保護者への啓発活動 ④進路実績の向上	○校内ネットワーク環境や通信機器の改善点を確認し、設備拡充に努める。 ○ICTを教育活動の場で実践・活用をする。 ○Microsoft Teamsを利用した学習活動を積極的に行う。 ○情報通信機器を利用した際に生じるトラブルや留意点などを周知する。 ○大学入試改革の情報収集とそれに合わせたICTを活用した進路指導を実践する。	○校内ネットワーク環境や通信機器の整備を計画的に進める。 ○それぞれの生徒に応じた、主体的な学びができる。 ○教職員のICTスキルが向上する。 ○学校の取組状況を発信し、ICTを使う機会を増やすことができる。 ○大学入試改革に対応し、進学率・難関有名大学への合格者数を増加する。	①ネットワーク環境の整備計画を作成し、それに伴い進めることができた。(B) ②オンライン授業は実践できたが、効果的なICTを活用した教育活動にはさらなる工夫、改善が必要である。(C) ③ICT活用に関する留意点などを周知し、活用方法についても紹介することができた。(A) ④国立大学では、電気通信大学、私立大学では、青山学院大学・明治大学など、65%の生徒が、四年制大学へ進学した。(B)	B ○校内のネットワーク環境の整備については、計画的に進められているが、まだ十分とはいえない。迅速に進めていく必要がある。 ○次年度の入学生からタブレット型PCを購入をしてもらう。それに伴いICTのさらなる積極活用を展開していく必要がある。そのためには、教員のICTスキル向上のための研修などを積極的に行うことが求められる。
2	○卒業研究などの、教科・科目の学習や五峯祭などの学校行事の取り組みをSDGsの取組と関連付けながら、グローバルな視野をもった教育活動をさらに推進していく必要がある。ESDやSDGsの活動を経常的に実践していくことが、今後とも必要となってくる。 ○ユネスコスクールとグローバルコンパクトに加入している学校として、現状でも可能な交流を実施し、情報の共有を行っている。継続し発展させることが課題となる。	①これまで取り組んできているESD(持続可能な開発のための教育)をもとに、SDGs(持続可能な開発目標)達成に向けた取組のさらなる推進。 ②地域の企業活動、連携や海外交流などの推進。	○SDGsを意識した学校行事を運営する。 ○生徒が学校生活を送る中でSDGsについて深く考える機会をつくる。 ○ICTを活用して、国際交流を実施する。また、グローバルコンパクト加入企業との情報共有などを実施する。	○ESDやSDGsに対する理解が深まり、行動に移すことができる。 ○地域の開放講座の参加、海外研究を通じた国際交流の中でESDやSDGsの取組を推進する。	①コロナ禍でも海外の学校と複数回のオンライン交流や異文化学習会などを通して、ESDやSDGsの取組を推進することができた。(A) ②新型コロナウイルスの影響で地域の活動を十分に推進することができなかった。(B)	B ○卒業研究や五峯祭など学校行事を通してESDやSDGsの取組は教員生徒ともに浸透してきた。さらに理解を深めるとともに具体的な行動につなげていく策をつくっていく。 ○生徒がSDGsの理解の深化や行動変容をしているのかを計る指標の作成を行う必要がある。
3	○新型コロナウイルスの感染拡大が懸念される中で、生徒及び教職員の安全衛生を管理しながら、授業、部活動、学校行事などの教育の質を確保していく。	①感染防止に向けた安全衛生管理 ②教育活動に関する機動的対応 ③生徒及び保護者等に対する適切な連絡体制の確保及び情報発信 ④国の動向に対する適切な対応	○感染防止対策マニュアルを作成し、実施する。 ○Microsoft Teamsを使用した健康管理や情報発信を行う。 ○手洗い、昼食時など感染リスクの高い場面での指導をする。 ○学校全体での除菌消毒、清掃活動を徹底する。 ○双方向を前提としたオンライン授業を実施する。 ○感染動向に合わせた分散登校や短縮授業などを実施をする。	○新型コロナウイルス感染防止に向けた取組を教職員、生徒が協力することができる。 ○感染対策をしながら、教育活動の質を確保する。 ○感染対策について、適切な情報発信をすることで、感染防止の意識向上や行動を促す。 ○感染状況に応じて、国や地方自治体の情報を収集し、適切な対応をする。	①新型コロナウイルス感染防止対策マニュアルに沿って、安全衛生管理をすることができた。(A) ②4月の後半からオンライン授業を実施するなど、登校できない間も学習の機会を設けた。(B) ②オンラインでの五峯祭の実施、感染対策をとった校外学習などできうる限り学校行事を実施することができた。(A) ③マチコミメール、Microsoft Teamsやホームページを活用し、連絡体制の整備、情報発信を行うことができた。(A) ④感染動向から国、地方自治体からの要請により、分散登校、短縮授業の実施など臨機応変な対応をすることができた。(A)	A ○今年度について、全ての学校活動が試行錯誤の中ですすめていくこととなった。次年度については、その経験や反省を生かし、感染症対策を徹底しながら、さらに教育活動の質を確保していく必要がある。また、感染予防対策については気を緩めることなく、生徒と教職員が一体となすすべていきたい。

学校評価
実施日 書面による評価
評価委員からの意見・要望・評価等
<p>・教員のICTスキルについては、かなりレベルの差があるので、統一した研修よりもレベルに合った研修内容にする方がよいと思う。 ・国の施策が前倒しで実施されることになり、公立小中学校でも一人1台のタブレットが可能になった。ハード面の環境が整備されてきたが、ソフト面(教員)の対面授業での活用が今後の課題である。 ・GIGAスクール構想の柱である個別最適化、生徒・教員の力を最大限に引き出す教育環境の整備の取組が必要である。</p> <p>・SDGsの目標には、様々な行動目標があるので、学校や家庭など身近なところからできることを取り組む必要がある。 ・本校は、数年前から先取りでSDGsの取組をされており、英語教育や国際交流にも力を入れている。将来、国際社会で活躍できる人材を育成する上で重要な取り組みと考える。 ・SDGsはいち早く教育に取り込み、保護者会の活動も含め毎年少しずつ活発になっていると感じる。時間はかかるが、生徒、教員全体が積極的に行動できるようになるとよい。</p> <p>・感染対策とともに、授業時数の確保や内容の定着を図る必要がある。家庭にいる時間が長くなると、生徒の心身の影響も懸念されるのでケアが大切である。 ・コロナに対して「正しく恐れる」ことが重要である。感染の有無等で差別があってはならないので、きちんと教える必要がある。小学校でも行事の中止や縮小が余儀なくされたが、標準の授業時数を確保することができた。今後も先が見えない状況が続くと思うが、オンライン授業の工夫も含め教育活動を継続させることが大切である。</p>